



## I はじめに

分科会基調は協力者から討議課題をもとに提案された。

全人教結成から 71 年が経過している。いま、あらためて、事実と実践で語らしめる先達の話が受け継がれようとしている。差別の現実から深く学ぶということが、いまだからこそ、より重要になってきているのだと思う。自分のことを振り返ってみた。2022 年にお亡くなりになった、全同教の元委員長であられた寺澤亮一さんは「同和教育は生徒をばかにしない教育だ」と仰っていた。あたりまえのようだがいつも自分を問うている。実践継承ということについて言えば、今年は、統一応募用紙制定から 51 年になる。統一応募用紙の趣旨をしっかりと伝えていかなければならない。さまざまな状況にある子どもたちの「いのち」「こころ」「からだ」が危機を訴えている。一人ひとりの生活実態をていねいにつかみ、課題を明らかにしていかなければならない。同和教育はたった一人からでもはじめて行くべきものだと思う。そして、同時に、差別と闘うには仲間が必要だ。同和教育は、その仲間とともに、生徒とともに、生徒にあわせて学校をつくっていくとりのくみである。そうしたとりのくみのなかで、私たち教員が、保護者が、子どもが、どのように変わっていったのかを、何に気づいたのかを明らかにしていきたい。

このような呼びかけの後、報告・討論に入っていた。

## II 報告及び質疑討論の概要

### －報告1－④

「ひとりひとりの『学びたい』気持ちに応えるチーム本庄」～生徒との対話を通して～

(宮崎県同教)

### －主な質疑と意見－

大阪 魅力的な学校だ。先生の思いに生徒が応えてくれていた。「honjyo 学」を通して生徒のつながりはどうなったか。A さんが所属していた部活動と「honjyo 学」のスポーツ講座を通しての変容について教えてほしい。

報告者 6講座に分かれているので、同じ気持ちを持つ生徒が集まる。その集団の中でどんな学びをしていくのかを生徒どうしが話したり、進路研究し、切磋琢磨していくことでつながりを深めていっている。部活動とスポーツ講座につながりがあり、「honjyo 学」も併せて成長していった。

東京 「honjyo 学」のカリキュラムはどのように作成されていったのか。先生方の苦労や悩みも含めて知りたい。

報告者 総合学科に改編していく過程のなかで作られていった。学級数が減っていく中、学校存続の危機感があった。どうやって存続させるかを地域と一緒に考えていった。魅力を増やしたいという思いで、町と取り組んでいく中で、改編を行っていった。制服の変更、デュアル実習の導入、E スポーツやダンスを採り入れている。現在進行形である。

福岡 6つの講座を詳しく教えてほしい。1～3年次の人権学習を行っていく中で、中高の連携はどうなっているか。

報告者 四年制大学講座、学び直し講座、公務員講座、スポーツ講座、資格取得講座、地域探究講座がある。学び直しはキャリア講座に見直している。市町村ごとに入学してくる生徒の状況を確認する場を設けている。市町村ごとに参加者は異なるがカウンセラーや生徒指導主事などが参加している。引継ぎを行っている。

奈良 本庄高校の認知度はどうなっているか。卒業生はどのように歩んでいるのか。

報告者 以前の「市内の学校への入学が難しいから来る」というイメージが残されている。発信

力不足かもしれないが、学力的に厳しい子が来るようなイメージがある。総合学科が理解されていないかもしれない。卒業生が頑張っている話は聞く。追跡調査等を行っていない。

**滋賀** 子どもの前で教師が自分を語ることが大切だと思う。それについて、学校全体ではどのように浸透しているか。

**報告者** 赴任して2年目に「honjyo 学」の作成が浮上した。担当している生徒に通級が必要じゃないかと思う子どもがいて、きっかけを与えてくれた。その子は小学生の時のいじめが原因で学校生活に支障をきたすことがあった。それを克服して、通級による指導を始めるようにした。本人は希望しなかったが、希望しないことを聞き取れたことは良かったのだと思う。

#### －報告2－④

「シマ」を学ぶ ～「復帰運動」と「ハンセン病問題」の授業実践から～ （鹿児島県同教）

#### －主な質疑と意見－

**奈良** 資料が欲しいので、奈良県から手紙を書いてもよいか。

**協力者** お願いします。

**兵庫** 「奄美の出身なら情熱的に歌えるでしょう」という言葉にへこんでしまったのはなぜか。また、それを差別だととらえて、どうやって自分を変えていったのか。

**滋賀** 知ることは大事だと思う。そのうえで、正しく知るということが大事とされ、それが差別をしない運動になっていく。つまり、差別をなくそうという運動にまで至っていないのではないだろうか。どうすればいいのだろうか。

**報告者** へこんだのは「奄美の人だから」と言われたから。そこに差別的なニュアンスがあった。闘うためには、気持ちを整理しなければならない。しかし、そのつらい思いを語れないシマの人たちがいる。自分を誇りにできるかどうか闘い方になる。知ることで勉強は終わり、そして、「かわいそう」という言い方になる。それではだめで、議論が必要になる。その議論で、差別をなくそうという方向へと

進んでいく。

**鹿児島** 私も奄美出身者だ。父を呼んで生徒に話をしてもらった。昨年、復帰 70 年を契機に日本復帰の授業をした。パレスチナ問題とガンジーの話をした。「自分には何もできない」と書いた生徒が、実際に経験をした人からの話を聞くことで、「一人ではだめだが、立ち上がった人がいて前進している」と書いてきた。こうした子どもの言葉から力をもらう。本土の生徒が「何が分かるのか」という気持ちもあった。しかし、経験をした人の話を聞いて、本土の子どもたちが変わっていく。その変化を知り、教師も力をもらうことができた。

**報告者** 復帰運動を取り締まる警官も、実は署名をしていた。それを劇にした人がいる。こうしたリアルな話が子どもたちには伝わる。人権学習では、たくさんの人の声に学びたい。

**新潟** 2011 年大会で、奄美の劇を見た。自分がいかに知らなかったのかを思い知らされた。奄美に高校生を修学旅行に連れて行った教員に誘われて分散会に参加した。奄美を差別する側にいる自分に思い至り、差別をする側こそが生徒に奄美のことを伝え、そのなかで変わっていかなければならない。学びをひろげていきたい。

**鹿児島** 復帰をしたいと思ったときに、沖縄をどうとらえていたのか。島々の間の差別について、子どもたちにどう伝えていくか。これを考えていきたい。

#### －報告3－④

「みんなと同じように、させたいんやろ？」

～Aさんの存在から、自分を問い直す～

（公社・滋賀県人教）

#### －主な質疑と意見－

**新潟** おじいちゃん、お母さん、新しいお父さんとの話を聞かせてほしい。A さんに対するクラスの仲間の見方を聞きたい。言いづらいことを A さんは報告者に語っている。なぜそうなったのか。何があったのか。

**報告者** A さんのお母さんは、A さんの住んでいる家の斜め前に住んでいる。しかし、お母さんは A さ

んに声をかけることはない。おじいさんも A さんとも会話がな。でも、おじいさんは、A さんが私との会話について、楽しそうに報告するのを聞いたのだという。そこから、おじいさんは遠足の弁当を作るなど、頑張ってくれている。クラスの仲間は A が教室に入ることはないだろうと受け止めていたが、私の A さんへの声掛けを見ることで、変化していったと思う。

**三重** A さんとお母さんの関係はしんどいものがある。A さんのお母さんへの気持ちをこれからどのようにして聞こうとしているか。

**報告者** 9月に、お母さんが、A さんを待ち伏せして「引っ越すから、いっしょに来ないか」と伝えた。A さんからそのことを聞き、「あなたはどうしたい」と返しなが、おじいさんにこのことを伝えた。おじいさんは「いまは、そのタイミングではない」と返してくれた。まずは、自分のことを話せる大人を増やしていこうと考えた。

**滋賀** レポートの最後に「ありのままの私で、A さんと話したい」と書いてある。このことについて聞きたい。

**報告者** どんな背景があっても、つながるということが一番したかった。しかし、実は、話すということが抜け落ちていた。そのことを書いた。

**滋賀** 「背景なんて関係なく人はつながれる」と考えていた報告者が、それがゆえに書ききれないところを、検討会のなかで指摘した。そのことでレポートが書き換えられていった。その変化がレポートの最後に表れた。

**報告者** 32 年間、表面的なつながりしかない中で生きてきた自分が嫌になって、本当につながるこの意味を考えるようになった。

**京都** 「つながる」ということの内実を考えた。A さんの方から報告者につながっていこうとしたのだということ考えた。A さんのことに関心を持っている教師たちが周囲にいたのではないか。

**報告者** 私のいる学校は「体育の時に体操服着ていないとダメ」とかという考え方を見直していこうとしている学校で、そういう方向で闘っていこうとしている先生たちがいる。管理職もそういう方向

に向かっている。そういう仲間に加わっていきたいと思っている。

**佐賀** おじいちゃん、おばあちゃんに育てられていた子を担任していた。その子は、父も、母もいなくなってしまっていた。その子を型にはめていこうとしていた自分がいた。自分のことをさらけ出すことで、生徒との関係が変わっていくことがある。

**東京** 保護者との関係に課題を抱えている子どもたちが東京にもいる。おとなとの良い関係をつくるために教師は重要な存在だ。そのことを確認しておきたい。

**鹿児島** 関連機関とのつながりはどのようにしているのか。

**報告者** ケース会議が何回も繰り返される日もある。福祉との連携もある。だから、A については、まず信頼できるおとなとの関係をつくることをめざした。

## 1 日目の総括討論

**協力者** 子どもの変容と先生たちが重なり、変わっていく姿がレポートから垣間見えた。自分のことを差し出しなが総括討議を進めていきましょう。

**奈良** 本庄高校さんには、こんな素敵な高校があるということを広げてほしい。特別支援学級に入ると、普通学校に行けないと言われるが、そんなことはない。よい学校とは何か。行ったところで頑張る。やりがいを見つけられる。

**三重** 中学教師として、奈良の方の話を聞きながら自分の差別心に気づかされた。進路指導の「学校選び」で、「学力は?」「荒れているよ」などの見方を、教師が植え付けている気がする。「やっぱりあの高校は」ではなく、もっと知っていくことが大切だと感じた。

**宮崎** 教え子を本庄高校に送り出した。成人式で、本庄高校を卒業した教え子に、偶然、出会った。20 歳になった子どもたちにこれからのことを聞くと「高校で自分の進路をこう決めたよ」と教えてくれた。小学校の頃と違い、とてもよく話してくれた。すごいなと思った。「Honjyo 学」を作ってくれた先生方にありがとうと言いたい。学ぶことが苦手

な子たちが「Honjyo 学」の学び直し講座で学び、変わってくれた。先生たちが変わらせてくれた。先生方に感謝している。

**滋賀** 自分の中で変化できていないことがあり、仕事の関係で子どもとあまり話せていない。自分が勤めている人権センターのことをもっと知ってほしいと思い、ピラを配って募集したら 20 人くらいの人が来た。映画を見たり、男女差別について考えたりした。ある日、プールに男の子を連れて行ったとき、ピンクの帽子とゴーグルを選んだ。そのとき、「それで大丈夫？」と心配してしまった。結局、「選択の邪魔しているのは自分だ」ということに気づいた。

**新潟** 報告者の子どもを見る目線の低さはすばらしいと思った。子どもの本当の課題は家庭の中にあると思うので、自分もよく家庭訪問をしていた。しかし、先生の中には、「そこまでするべきなのだろうか」と思う人もいる。報告者は本当に愛情をもって子どもと接していると思う。今の子どもたちは様々なストレスを感じているが、報告者のような接し方で、子どもと関わっていけたらと感じた。

## 2日目

### 昨日のふりかえり

1日目の3本の報告に共通するのは、自分自身と差別との出会い、差別を受けたとき、差別をしてしまったとき、どう向き合ったのか、向き合ってきたのかを確かめていくことの大切さだと感じた。

#### －報告4－④

こんなに居心地がいい場所はほかにはない  
(高知県人教)

#### －主な質疑と意見－

**報告者** 児童養護施設から適応指導教室に通う A さんと一緒に合唱するために、歌の CD と歌詞をクラスのメンバーが渡すことで、合唱コンクールに参加することができた。このことを通してエンジェルハートや学級会の活動がより、真剣に行われるようになった。

**鹿児島** エンジェルハートや学級会の取組みは、学年、学校全体で取り組まれているのか。

**報告者** 1年団で共通して取り組んでいる。他学年団も共通して行っている。エンジェルハートや学級会は、地区の小中で連携して行われている。

**鹿児島** A さんに対するエンジェルの取り扱いはどうなっているのか。

**報告者** 別室登校している生徒などには、給食を持っていき、声掛けをするなどしている。不登校の生徒には、担任がエンジェルになる。

**鹿児島** 保護者と教師の結びつきについて聞きたい。

**報告者** 学校全体で、家庭訪問を大切にしている。また、学級通信を大切にしている。生徒が他の生徒のいいところを書いたものをまとめ、それを学級通信にして保護者と共有している。

**大坂** 人権課題を解決するためにクラスを変え、社会を変えていく。学級会を小中で連携してやろうということになったプロセスを聞かせてほしい。

**報告者** 小学校での学級会の研究授業に参加して学んだ。素晴らしい取組みだが、それが中学校へとつながっていない。小学校の学級会を中学でもやろうという取組みへとつなげていった。

**兵庫** 集団的自尊感情を高めていく実践の報告だった。この実践と人権学習との関係を教えてほしい。

**報告者** 基盤として、こまったときに助けてほしいと言える生徒、間違っていることは間違っていると言える生徒を育てていきたいという思いがある。

**高知** 教員生活の 3 分の 2 を鏡野中学で過ごしてきた。鏡野中学は、すべての学びの中に人権学習を位置付けている。

**東京** 正しく知ることはできるが、行動に移すことは難しい。学級の変容が、人権課題への子どもたちの動きの変化へと結びついていったという事例を教えてほしい。

**報告者** 間違っていることは間違っていると言える子どもたちになってきているのではないかと。

**高知** 鏡野中学には、傍観者ではなく、安心して通うことができる学校づくりをしていきたいという

子どもたちの動きがある。

**鹿児島** 30人学級の中で、いいことをしたときに連絡したり、電話したりはしてこなかった。「業務改善」のなかで、家庭訪問にどのくらいしているのか。

**報告者** 月に1回、まんべんなく家庭訪問に行っている。「指導」的なことでの電話ばかりでは、つながりは作れないだろう。

**鹿児島** 中学卒業後、高校へのつなげ方について、教えてほしい。

**報告者** 高校サイドから、中学校へと出向いて来てくれている。鏡野中学は、すべての生徒の進路を保障しようとしている。

#### －報告5－④

けんと、ようがんばったな

～機微の変化を見逃さない3年間のあしあと～

(大阪市人教)

#### －主な質疑と意見－

**鹿児島** 「教員が壁になったらアカン」の「壁」とは何か。

**報告者** 教員が生徒の会話に割って入って助言したりすることがある。生徒の素直な気持ち、ありのままの生徒の言葉を大切にしていきたいということだ。

**大坂** 「ゆい」や「あや」が、なぜ声をかけ続けてくれたのか。その背景を知りたい。日々の取組みと「しかけ」について教えてほしい。

**報告者** 放課後の班長会議の話し合いの中で、「ゆい」や「あや」と話し合ってきた。「あや」は小学校の時から「けん」と遊んだりしてきたことがつながりになっている。日々の取組みとして、自分の取組みだけでなく、福祉体験や車いす体験などの学校全体での取り組みもある。

**兵庫** 発達障害の授業のなかで自分のお子さんのことを生徒に伝えるなど、先生自身が自己開示をしている。自立活動や「けんと」を中心とした授業づくりについて教えてほしい。

**報告者** 「入込み」でやっているの、「けんと」はほ

ぼ学級で過ごしている。SSTを通して、クラスを引っ張っていかうとしてきた。ワークシートを使うなどして、どの生徒にも学びやすい授業づくりを目指している。

**大坂** この報告のキーワードは、「迷惑」と「理解」だと思う。マイノリティに「迷惑かけてすみません」と言わせてしまう学校のあり方を問わないといけない。「けんと」をとりまく周囲の生徒の変容を聞きたい。

**報告者** 発達障害の授業をしたことで、生徒の様子が変わってきた。

**滋賀** 「どんな障害があっても、認め合える仲間がいれば乗り越えられる」という言い方のなかにすこし違和感があった。「かわいそう」という見方があるのか。自分自身が「壁」になっているというのは、これは自分自身が生徒にとっての「障害になっている」ということなのか。

**報告者** 「かわいそう」という見方としての「壁」は、子どもたちの中にはなかった。

**滋賀** 教師自身が生徒の障害になっているのかもしれないという視点は必要だろう。そうした視点で自分を見たときに、何か気づくことはなかったのか。

**報告者** 想定外のことがあった。席のことで、「けんと」が怒り出すことがあった。

**鹿児島** 小学校の特別支援学級に長く勤めてきた。ある児童が他の都府県に転居したことで、配慮してもらえなくなった。そういうときのために、子どもに力をつけていくことも大切なのではないかと考えた。

**佐賀** 報告者は、「けんと」にとっての伴走者だった。障害は自分にあるのではなく、周囲が作り出すものだと思う。そして、生きづらさをどうやって支えていくのかも考えたい。

**報告者** マジョリティがマイノリティを理解することが大切で、そして、マイノリティの生徒をいつも見守りつづけていきたい。

**大坂** 我孫子南中学は、立場として弱い生徒を中心に据える学校づくりをすすめている。その中心に「知る、理解する、協力する」をめざす班活動の取組

みがある。

**鹿児島** 「けん」とはいま元気にやっているか。

**報告者** 元気にやっている。いろいろなこともあるが、がんばっている。

## 2日目の総括討論

**兵庫** 自分はなぜ全人教に参加しているのか。全同教から全人教への再構築のなかで、同和教育が育んできたものを伝えていきたい。しんどい子を中心にした仲間づくりが大切だ。自分のしんどさもさらけ出しながら生徒との信頼関係をつくっていく。家庭訪問がやはり大切だ。働き方改革のなかでも、「教育は、今日行く家庭訪問」であってほしい。教師が変わり、子どもが変わる。これが同和教育なのではないか。人権学習はやはり土台になってくる。差別が氾濫するネット社会のなかで、いまだからこそ、正しく教えることが大切だ。

**鹿児島** 教師が子ども同士の関係を切ってしまうということに気がつかないといけない。特別支援学級に生徒を入れようとして、説得のために家庭訪問に行ったことが、かつてあった。保護者から「これからみんなで生きていくのに、大人になってからみんなで仲良くしなさいというのは無理ではないですか」と伝えられた。そして、その生徒は、自分が担任することにした。子どもの力はすごい。そのつながろうとする力を教師が引きちぎってはいけない。私は、奄美に生まれた。それなのに、自分の生まれを隠そうとしていた時期があった。しかし、同和教育と出会って、自分のふるさとを隠さずに生きようと思えるようになった。

**大坂** 我孫子南中学は全員の教師が全員の生徒の面倒を見る学校だ。正しいことを知る、ということがやはり大事だ。地域の学習をすることを地域とつながりながらつくりあげてきている。

**兵庫** 大会に参加することで元気をもらう。やはり家庭訪問は大事で、「ピンチはチャンス」でもある。教師集団の協力が大切になってくる。

**鹿児島** 鹿児島の報告者の話を聞いて、正しく知ることの大切さを知った。奄美のことを学んでこなか

った自分を振り返った。西郷さんのことを英雄視する教育を受けてきた。今回の報告で、自分の生きてきたこと、学んできたことを問い直すことになった。

**高知** 鏡野中学の同和担当だった。差別をなくしていくには、仲間づくりが大切で、学級が解放されていないと仲間づくりはできない。部落問題を考えるうえで、この仲間づくりは欠かせない。家庭訪問は親の話聞くことが大切で、学校の話を一方向的にしていく場面ではない。働き方改革だからといって、家庭訪問をしてはいけないということにはならないはずだ。

**鹿児島** 人権同和教育に出会わなかったら、教員をつづけることはできなかっただろう。どうやったらよい教職員集団をつくることができるのだろうか。

**滋賀** 当事者性とは何か。差別を許さないという気持ちになったときに人は当事者になるのだと思う。

## III まとめ

協力者からのまとめは次のようなものとなった。

それぞれの報告は、しんどい子の思いにつながり、差別の現実から学び、同和教育が大切にしてきたものを受け継ぎながら、日々の実践を積み上げていこうという励ましとなった。勇気と元気をもらった分散会であった。